病と闘う患者のために 疾患啓発活動

製薬産業

患者数の少ない希少疾患は約7000あるとされるなど、世界には非常に多くの病気が存在する。生活習慣病のように比較的身近と考えられている疾患でも、生活者には正しい知識が伝わっていないことが往々にしてある。症状が悪化する前に医療機関へ足を運んでもらいたい、多少なりとも治療の後押しをしたい―。製薬各社はこうした思いを胸に、多様な疾患啓発活動に取り組んでいる。

禁煙は医師と一緒に

テレビCMでメッセージ

ファイザーはニコチン依存症についての疾患啓発キャンペーンでタレントの上田晋也さんを起用

ファイザー（東京都渋谷区）は6月、「ニコチン依存症」についての疾患啓発キャンペーンを始めた。

ニコチン依存症は、医療機関で医師・看護師のサポートを受けながら治療を受けることができる疾患だ。にもかかわらず、一部ではニコチン依存症が疾患として捉えられず、適切な治療に結び付いていない実情が見受けられるという。

厚生労働省は2016年8月、15年ぶりに「喫煙の健康影響に関する検討会報告書」、通称〝たばこ白書〟を改訂し、喫煙者のリスクおよび受動喫煙が人に与える影響について公表した。それによると、日本での受動喫煙による推定死者数は1万5000人。

また17年3月には厚労省から受動喫煙防止対策強化についての基本的な考え方の案が示され、多様な議論が展開されている。

ファイザーはこのような社会的背景が、喫煙者・非喫煙者を問わず、喫煙について考えるきっかけとなると指摘。禁煙について前向きに検討し始める喫煙者や、そのような人をサポートする家族などの関係者も多く出てくると考えた。

一方で同社が16年に実施した「喫煙に関する47都道府県調査2016」など多くの調査において、喫煙者がなかなか禁煙に踏み出せなかったり、自力で禁煙に挑戦し失敗してしまったりするという、ニコチン依存症の実態を物語る内容が示されているとしている。

そこで今回のキャンペーンでは、禁煙経験のあるタレントの上田晋也さんが約3週間、テレビCMなどに登場。CMでは上田さんが、「あのたばこもそのたばこもやめたくてもやめられないのは、ニコチン依存症の可能性があります」「禁煙外来で約8割の成功率」「禁煙はひとりでするより、お医者さんと一緒に」といったメッセージをテンポよく語った。

上田さんは出演にあたり、「私自身、過去に禁煙を達成したが、自力で禁煙したためとても苦労したのを覚えている。今回の活動をきっかけに、禁煙治療へ踏み出すか迷われている方の背中を押し医師に相談されるきっかけとなり、たばこから離れられることにつながればと思う」とコメントしている。

ファイザーはキャンペーンに合わせ、禁煙疾患啓発ウェブサイト「すぐ禁煙．jp」も刷新。今後も有用な情報の提供を続けていく構えだ。

糖尿病には運動療法

学会併催、名古屋でイベント

ノボノルディスクファーマは5月19日、名古屋市でラン＆ウォークイベントを開催

ノボノルディスクファーマ（東京都千代田区）は17年5月、名古屋市で開催された第60回日本糖尿病学会年次学術集会の併設プログラムとして、ラン＆ウォークイベント〝チェンジング・ダイアベーツ・モーニング・ラン＆ウォーク・イン・ナゴヤ〟を開いた。

このイベントは、糖尿病の治療には欠かせない運動療法の実践と普及、健康増進を目的に、学会参加者とその家族に向けて開催した。約500人の参加者が、名古屋城を中心とした約3・8キロメートルの特設コースを走った。同様のイベントは10年に始まり、今回で7回目を数える。

第60回日本糖尿病学会年次学術集会で会長を務めた愛知医科大学医学部内科学講座糖尿病内科の中村二郎教授は同イベント開催について、「糖尿病予防やより良いコントロールには健康的な生活習慣が重要であることの理解が広く一般に知られることを期待している」とコメントしている。糖尿病患者や家族を勇気づけるきっかけにもなったことだろう。

脳卒中患者・家族を支援

団体や個人の活動 顕彰

6月17日に大阪市北区で開催された日本脳卒中協会「サノフィ賞」表彰式

病と闘う患者や闘いを支援する関係者の姿を製薬会社がたたえ、疾患啓発の機運を高める試みも活発だ。サノフィ（東京都新宿区）と日本脳卒中協会は6月、大阪市北区で開催された同協会社員総会において、17年度日本脳卒中協会「サノフィ賞」受賞者の発表と表彰式を行った。この賞は、脳卒中患者・家族に対する教育・訓練・社会参加への支援活動に貢献した個人や団体の顕彰を目的として、10年に創設された。

17年度の受賞者は、1団体と個人1名。団体は大阪府泉佐野市、同熊取町、同田尻町、同泉南市、同阪南市、同岬町、大阪府泉佐野保健所、泉佐野泉南医師会からなる「泉州脳卒中予防チーム『備長炭』」が「啓発部門」で受賞した。

このチームは心房細動患者を早期発見して適切な脳梗塞予防につなげることを目的に、国民健康保険（国保）特定健診による心電図検査や脈拍不整のチェック、抗凝固療法が可能な医療機関リストの作成と心房細動疑い患者への受診勧奨などを実施。保健所が中心となって行政と医師会が連携体制を構築し、保健と医療の多職種連携事業を展開したことや、同事業が日本全国へ広げられるモデルであるといった点が認められ、受賞に至った。

また、個人では沼尾ひろ子さんが「社会参加支援部門」で受賞。14年に「NPO法人脳梗塞患者と失語症者の自立支援の会」を設立し、失語症患者の社会復帰を支援する活動を行ってきた。アナウンサー／ナレーターという職業を生かし、メディア出演や講演を通じて脳梗塞の予防と失語症についての啓発活動もしてきた。加えて、世界脳卒中機構の〝アイ・アム・ウーマン〟キャンペーンに協力した点が評価された。

日本脳卒中協会はこれまで、脳卒中撲滅のための知識の普及や、最適な治療につながる情報提供などを行ってきた。サノフィの支援が加わることで、そうした活動の実効性がさらに高まることが期待される。